

優秀賞

「思いやり」の言葉の大切さ

奈良県 富雄第三中学校 二年

野津 怜那

私にとって、とても大切で大好きな祖父。その祖父が、昨年亡くなった。病室でがんばっている祖父の姿は、今も鮮明に私の心に残っている。家族みんな祖父のことが大好きで、祖父の死をなかなか受け入れられなかった。そして、とても大きな悲しみも同時にやってきたのだ。

そんな、大好きで大切な祖父は生前、元気だった頃に、祖父母宅の地域で、子どもたちの登下校の見守り活動をしていた。雨の日も、雪の日も、どんなに寒い日でも、かかさず毎日、子どもたちを見守り、朝のあいさつ活動をしていた。子どもたちに、「おはよう」「いってらっしゃい」「おかえり」などと、声かけをしていることを、祖父からよく聞いていた。

「元気にあいさつしてくれる子どももいれば、恥ずかしいのか、あまり声を出せない子どももいるんだよ。」

と、見守り活動の様子を聞かせてくれることもあった。あまり声を出せない子どもたちでも、毎日、祖父たちが元気に声をかけ続けていると、少しずつあいさつをしてくれるようになるそうで、

「そんな姿を見られるだけで、嬉しい気持ちになるんだよ。」

という話も聞かせてくれていた。祖父たち見守りの方々がかけてくださる言葉、日常のあいさつ、はげましの声というのは、本当に偉大なものなのだと感じた。

また、祖父からはこんな話を聞いたこともあった。毎日見守り活動を続けていると、（今日はおの子がいないから休みかなあ）とか、（この子はいつも元気なのに、今日はあまり元気がないなあ）など、毎日のあいさつを交わすだけで、いろいろなことを感じるようになっていたそうだ。

私は、祖父から話を聞くたびに、「日常のあいさつ」という〈言葉の大切さ〉を考える良い機会を与えてもらっていた。

祖父が亡くなり、ある日、いっしょに見守り活動をされていた方が祖父のお参りに来てくださったとき、

「見守り活動をしていると、『もう一人のおじさん、最近見かけないけどどうしたの?』と、子どもたちが声をかけてくれるんだよ。」

と教えてくださった。家族みんな、

「子どもたちから気にかけてもらえるなんて、嬉しいね。あいさつを続けて、子どもたちといい関係を築いてきたんやね。」

と話し、祖父の尊敬できる一面をまた発見できて嬉しかった。

祖父がこんなにすばらしい人脈を築けたのは、毎日の〈あいさつ〉〈はげましの声〉に込めた「思いやり」によるものだと思う。私は大好きな祖父から、「思いやり」の言葉の大切さを心から実感させてもらうことができた。